

大学史展示室 特集展 12

澤木興道墨蹟展

～五十回忌をしのんで～

会期 平成 26 年 9 月 16 日（火）～ 12 月 20 日（土）

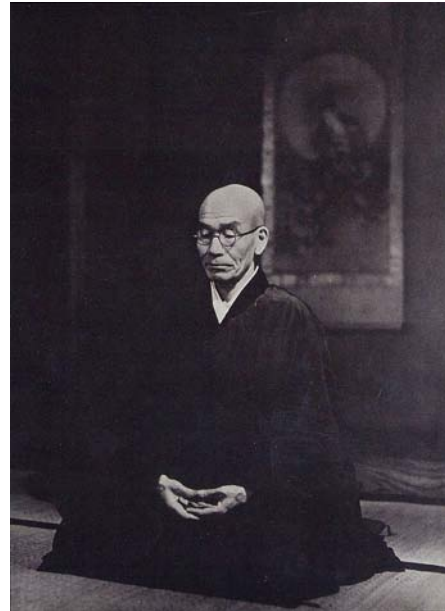
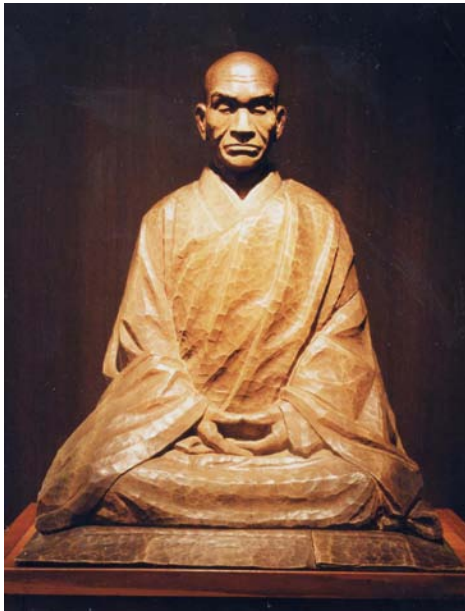
場所 駒澤大学禅文化歴史博物館 2 階 大学史展示室

主幹 駒澤大学禅文化歴史博物館 大学史資料室

澤木興道（さわきこうどう、1880～1965）は、明治～昭和期の曹洞宗の禅僧で、今日の曹洞宗の坐禅の普及に努めた人物として知られています。澤木師は寺の住職にならず、「行雲流水」の生涯を貫いた清貧な姿は「宿なし興道」と呼ばれ、今日なお尊崇する人は絶えません。

また澤木師は昭和 10～38 年の間、本学の坐禅担当教授として赴任され、本学の坐禅の授業の基礎を築き、その峻厳な指導法は今日に継承されています。

本年は澤木師の五十回忌に当たります。これにちなんで当館大学史資料室では、本学に所蔵される澤木師の墨蹟を中心に展示し、師の遺徳をしのびたいと思います。



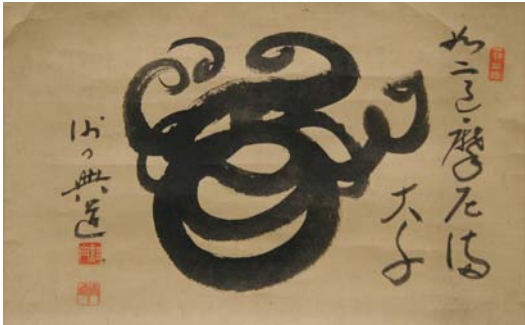
凛々たる気迫—坐禅像のモデル—

右の写真は、当館 1 階展示室の「澤木興道老師坐禅像」（左）のモデルとなった写真である。曹洞宗の祖・道元禅師が説いた坐禅の教え「只管打坐（しかんたざ）」（ただひたすら坐る）の真髓がうかがわれる。

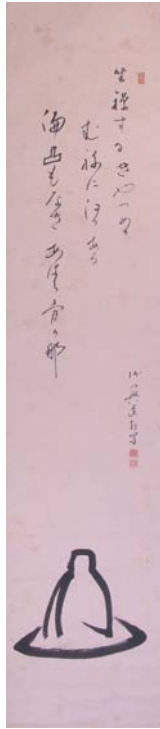
「坐禅は龍の蟠（わだかま）るがごとく、颯爽（さっそう）たる姿勢と凛々（りんりん）たる気迫がこもっていなければならない。借り物の猫のようにふにゃっとした坐禅、気の抜けたビールのような坐禅は何年やっても無駄だ。」という澤木師の言葉がそのままにじみ出ており、迫力に満ちている。

坐禅像の作者は彫刻家・金保正智（かねやすまさち）（1908～58）。澤木師との知遇を得た一人である。本像は平成 14（2002）年まで本学坐禅堂に安置され、学生たちが坐禅に打ち込む姿を見守り続けてきた。

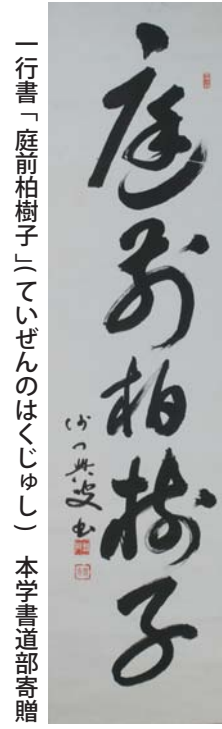
澤木興道の墨蹟



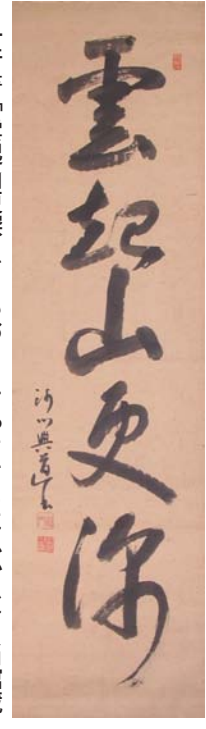
如意摩尼画賛 (によいまにがさん) 本学図書館蔵



達磨図 (だるまず) 当館蔵



一行書「庭前柏樹子」にていぜんのはくじゆし(本学書道部寄贈



一行書「雲起山更深」くもおこりてやまなほにふかし(当館蔵

如意摩尼は如意宝珠・摩尼宝珠ともいい、求めるものを意のままに出す珠のこと。仏性そのものと理解されている。澤木師は如意摩尼を好んで書し、遺墨にも多く残されている。賛は「如意摩尼満三千」。「大千」は「三千大千世界」のことで仏教世界・宇宙のすべてをいう。「如意摩尼はすべての世界を満たす」の意。

達磨図は、澤木師が葛城山人こと慈雲尊者(慈雲飲光<じうんおんこう, 1718～1805>)の描いた達磨図を模写し、併せて尊者の和歌を添えたもの。箱書きには「葛城山人坐禅するの句」とある。慈雲尊者は江戸時代に活躍した真言宗の僧侶で、仏教諸宗派や神道を問わず広く学識を深め、戒律の復興に努めた。また和歌の名手でもあった。澤木師は尊者を尊崇し、とくに尊者が著した『方服図儀』(袈裟のあるべき姿や正しい着用法を著したもの)に深い感銘を受け、尊者ゆかりの葛城山の高貴寺(大阪府河南町)まで尊者の袈裟を拝観しに訪れたことがある。

「庭前柏樹子」は著名な禅語の一つで、禅の入門者が必須とする公案(禅問答)である。唐の高僧・趙州(じょうしゅう, 778～897)が、ある僧に「禅の始祖達磨が西からやって来た理由は何か?」(=禅の真理とは何か?)と問われ、趙州は「庭先にある柏の木だ」と答えた。目の前の何の変哲もない柏の木そのものが禅の教えだというのである。何も特別なことはなく、日常のあらゆるところに真理は満ちている。禅の真理にとらわれない思慮分別を超越した絶対的な境涯を表している。

「雲起山更深」は、雲が湧きたつ深山の幽玄なさまを表している。澤木師の遺墨に散見される句で、師が好んだ句なのであろう。



和歌五首 (屏風) 当館蔵

澤木興道の遺墨は、禅語・仏教語などの墨蹟や絵画にとどまらず多岐に渡り、和歌も多く残されている。とくに澤木師が敬愛してやまない曹洞宗の祖・道元禅師(1200～53)と、宗派を超えて尊崇した真言宗の慈雲飲光の和歌を好んで書した。本屏風には、道元禅師の和歌集『傘松道詠(さんしょうどうえい)』から三首、慈雲飲光の和歌から二首が貼り混ぜられている。

澤木興道 略年譜

誕生から一家離散、出家への道

年代	西暦	数え齢	事項
明治13年6月16日	1880	1	三重県津市新東町の人力車職人多田惣太郎の四男として誕生。幼名才吉。
明治17年	1884	5	母しげ死去。
明治20年2月	1887	8	父惣太郎死去。一家離散し、父方の叔母ひいの方に預けられる。
明治20年8月	1887	8	叔父(ひいのの夫)死去。小沢芳太郎の舅の知り合いの澤木文吉の養子になる。
明治21年	1888	9	女郎屋の二階で急死した男を見て無常を痛感する。
明治25年3月	1892	13	尋常小学校(四年制)卒業。
明治29年6月10日	1896	17	家出し、曹洞宗大本山永平寺に入り、作事部屋の男衆として働く。
明治30年1月	1897	18	永平寺で修行していた天草の僧の紹介で、天草宗心寺に向かう。
明治30年12月8日			曹洞宗宗心寺(熊本県天草市)の沢田興法のもとで出家得度。以後、澤木興道を名乗る。

出征、帰国そして坐禅三昧の日々

年代	西暦	数え齢	事項
明治37年8月31日	1904	25	日露戦争に出征し、首山堡の戦い(遼東半島)で重傷を負う。帰郷し療養する。
明治38年2月	1905	26	再出征。昌図(現遼寧省)に駐屯し、翌年1月に帰国。
明治39年秋	1906	27	真宗高田派専修寺専門学校(三重県津市)に入学。
明治41年	1908	29	法隆寺勸学院に移り、唯識学を中心に学ぶ。
大正元年12月	1912	33	曹洞宗養泉寺(三重県松坂市)に招かれ、単頭(坐禅指導監督者)に就任。
大正2年5月	1913	34	丘宗潭(後の駒澤大学長)に出会い、以後各地に随身する。
大正3年秋	1914	35	法隆寺に近い空寺、葦垣宮成福寺に住み込む。以後、門を閉め坐禅に明け暮れる。
大正5年5月	1916	37	曹洞宗大慈寺(熊本県熊本市)の僧堂講師に赴任。
大正11年	1922	43	大慈寺を去り、熊本市内の借家に住む。(大徹堂と命名)
大正12年	1923	44	熊本駅裏の万日山にある柴田家別邸に移転。坐禅三昧の日々を送る。

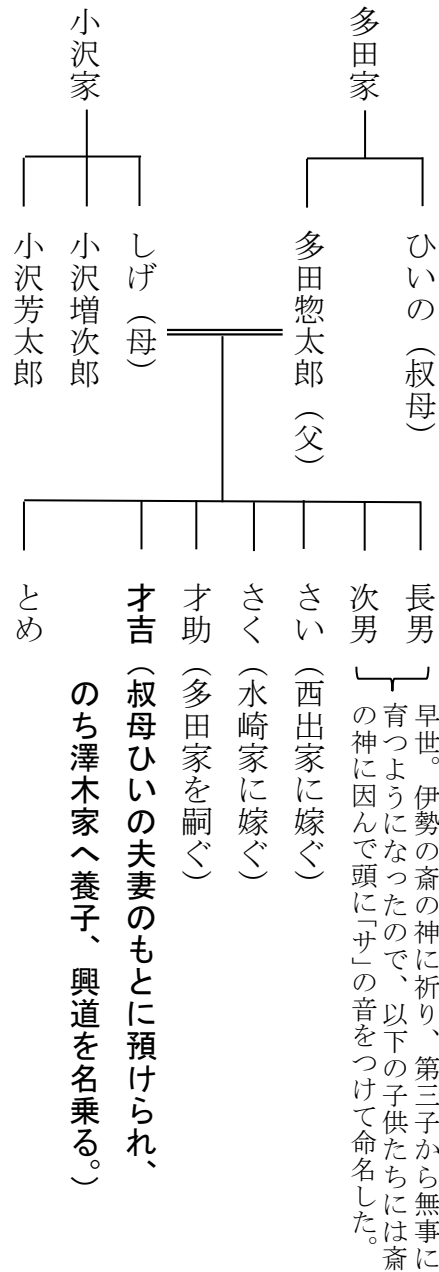
以後、講演、説法、坐禅会指導などで各地に招かれる。

駒澤大学への赴任、東京での坐禅普及

年代	西暦	数え齢	事項
昭和10年4月	1935	56	駒澤大学教授に就任。
昭和10年12月			大本山總持寺後堂(修行の責任者)に就任。
昭和16年6月	1941	62	總持寺後堂退任。
昭和18年	1943	64	東京都渋谷区千駄谷に至誠寮を開き、隣に参禅道場を開設。
昭和24年6月	1949	70	東京都港区芝三田松坂町の藤田次郎邸に移転し、同宅に参禅道場を開設。
昭和38年3月	1963	84	駒澤大学を辞任。本学名誉教授となる。
昭和38年6月			京都府安泰寺に隠居。(安泰寺は現在は兵庫県新温泉町に移転)
昭和40年12月21日	1965	86	午前1時15分、安泰寺にて逝去。遺体は京都大学医学部に献体。

酒井得元著『澤木興道聞き書き』(講談社学術文庫、1984年)を参考に抜粋して作成

澤木興道 関係略系譜



酒井得元著『澤木興道聞き書き』(講談社学術文庫、一九八四年)所収の系図を参考に作成

そのほかの展示資料

- 澤木興道書簡(昭和10年2月,駒澤大学長大森禅戒宛て)中條道昭氏寄贈

澤木師が駒澤大学の坐禅担当教授赴任の要請を受諾した書簡

別刷り「新寄贈資料紹介～澤木興道の書簡～」を参照

- 澤木興道の著作『禅談』(大法輪閣/1938年)本学図書館蔵

『坐禅の仕方と心得 附・行鉢の仕方』(代々木書院/1939年)本学図書館蔵

『證道歌を語る』(大法輪閣/1940年)本学図書館蔵 ※澤木興道師の寄贈本

- 澤木興道の肉声—音源:「釈尊最後の教え 正法眼蔵八大人覺講話」(大法輪閣)当館蔵

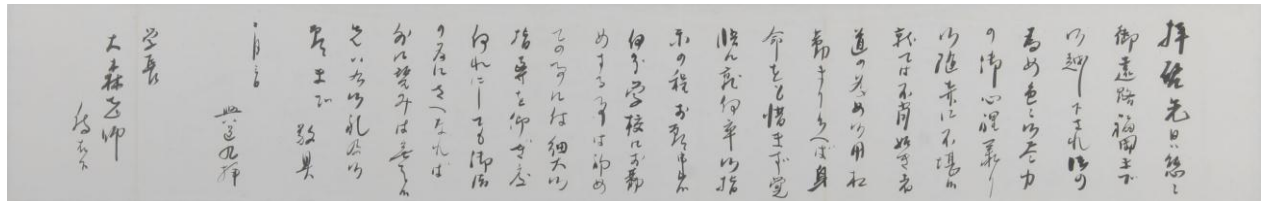
昭和37(1962)年10月26日 青松寺(東京都港区)の眼蔵会において

新寄贈資料紹介～澤木興道の書簡～

今回寄贈を受けた資料は、近代の傑出した禅僧澤木興道師（さわきこうどう,1880-1965）が、本学第 9 代学長大森禅戒（1871-1947）の招聘を受けて、本学初代の坐禅担当教授を受諾する決意を述べた貴重な書簡である。澤木師が本学教授に就任したのは昭和 10（1935）年 4 月のことであるので、本書簡は同年 2 月 3 日のものであることがわかる。

本書簡は先年亡くなられた元本学竹友寮寮監松本雍親師（1925-2009）が長らく所持されていたもので、晩年、師と親交の深かった北海道根室市開法寺住職中條道昭師に託され、中條師が平成 24（2012）年の本学開校 130 周年に因んで、書簡が入っていた封筒とともに、特に寄贈下さったものである。

開校 130 年にあたる記念すべき年にこのようなすばらしい書簡を寄贈いただいたことは、まさしく尊い「仏縁」であるといえよう。

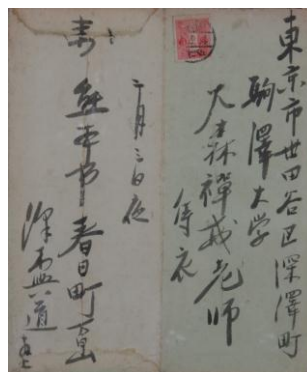


澤木興道書簡（縦 18.2 cm・横 111.8 cm）

拝啓 先日は態々御遠路福岡まで御越し下され法の為め色々御尽力のお心裡承り御随喜に不堪候就ては不肖如き者道の為め御用相勤まり候へば身命をも惜まず覚悟に就何卒御指示の程お願申上候何分学校にお勤めする事は初めの事に付細大御指導を仰ぎ度何れにしても御法の為にさへなれば外に望みは無之候先は右御礼及御願まで
 二月三日 敬具
 興道九拝
 学長
 大森老師
 侍衣下

澤木興道の半生 澤木師が生まれたのは明治 13（1880）年。本学開校の 2 年前である。三重県津市の多田家に生まれたが、幼くして両親を亡くしたため、親戚の澤木家の養子となった。17 歳の時、家を飛び出し永平寺を訪ねた。その後、諸寺院を遍歴、一時期は日露戦争に従軍し重傷を負った。大正 12（1923）年より、縁あって熊本市郊外の万日山（まんにちやま）の頂上に庵を構え、坐禅に打ち込む日々を送っていた。

書簡が入っていた封筒（消印は「10.2.4」）



（裏）

（表）

（封）熊本市春日町万日山

澤木興道 拜上

（裏）

二月三日夜

侍衣

東京市世田谷区深澤町
 駒澤大学
 大森禅戒老師

（表）

駒澤大学赴任の要請 昭和9（1934）年の秋、56歳の時、万日山にいた澤木師は、大森学長より手紙をもらい、12月に博多明光寺で面会することになった。書簡冒頭の「先日は態々（わざわざ）御遠路福岡まで御越し下され」とはその時のことである。大森学長の目的は駒澤大学教授赴任の要請であった。

澤木師の回想（酒井得元『沢木興道聞き書き - ある禅者の生涯 - 』講談社、1984年）によると、大森学長から突然、駒澤大学赴任の話がされ、「返事は、はっきりしたもので、すぐさまことわってしまった」であった。しかし大森学長は「あんたがウンと言ってくれなければ、幾日でも帰らず、ここで頑張る」という熱意に負け、ついに引き受けることになった。

その受諾の返事が本書簡である。日付は2月3日。12月の面会以来、考え続けていた澤木師の心中が察せられる。その決意の心うちは「不肖如き者、道の為め御用相勤まり候へば、身命を惜しまず覚悟に就（つき）」「何分学校にお勤めすることは初めての事に付」など、本書簡から如実にかがうことができる。



第9代学長 大森禅戒



坐蒲

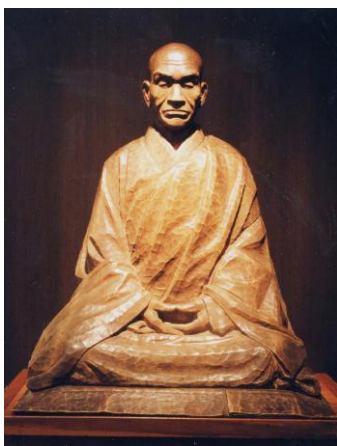
駒澤大学での坐禅指導 駒澤大学に着任した澤木師は、それまで本学では使っていなかった坐蒲（坐禅の時に尻の下に敷くクッション）を導入した。この時のことを、「（駒澤大学では）尻を高くすることをみな知らなかった。これにはわしも驚いた。参禅部長先生をはじめご存じないといった按配だからびっくりしたもの無理はない。そこでわしは坐蒲を千個ばかり買って、三百個ぐらい学校の備品にしてもらい、残りは、一個一円五十銭のものを七十銭にして頒布して、坐禅の普及をたくらんだ」と回想している（酒井得元同書）。（※現在は一個四～五千円）

また、当時、本学では坐禅が正科ではなかった。澤木師は早速学長に交渉したが、らちがあかず、辞表を提出したところ、学長は驚いて坐禅を正科にしたという。しかし師は「必修科目として縛られ、強制されてやるものに本当の坐禅ができるはずがない」と後年悔やんでいる（酒井得元同書）。

澤木師は、それまでどこの寺の住職にならず、肩書きを持たず、まさに行雲流水の道を貫いていた。「宿なし興道」と呼ばれたゆえんである。本学に着任したことを「ついに傭（やとわ）れ者になる」「とうとうわしも坐禅で給料をもらうようになり、宗門のわくの中の人間となっしまい、わしの坐禅もむずかしくなっていた」などと述懐している（酒井得元同書）。しかし、本学の坐禅の形を築いたのは、澤木師の尽力によるものであり、師の導入した坐禅の伝統が現在も継承されている。

澤木師は昭和38（1963）年までの28年間、本学で坐禅を指導した。同年辞任し、発病のため京都安泰寺に引退。昭和40年12月21日に85歳の生涯を閉じた。

澤木師に師事した者、影響を受けた者、また師と親交を持った者は、宗教人から文化人、企業人など多岐にわたる。当館展示室入口扉脇の「澤木興道老師坐禅像」は、澤木師との知遇を得た一人、彫刻家・金保正智（1908-58）の作品である。平成14（2002）年まで、本学坐禅堂に安置され、学生たちの坐禅の姿を見守り続けていたものである。澤木師の坐禅の「凛々たる気迫」を今に伝えている。



澤木興道老師坐禅像（金保正智作）
当館蔵